文化庁 Japan Cultural Envoy Forum 2016
文化交流使フォーラム2016

第13回文化庁文化交流使活動報告会

日本の心を世界に伝える

Conveying the Spirit of Japan

報　告　書

目次

文化交流使事業概要 P.4

文化庁文化交流使フォーラム 2016 議事録 P.7

活動報告

プロフィール P.18

岡田 利規※ P.20

櫻井 亜木子 P.22

山井 綱雄 P.24

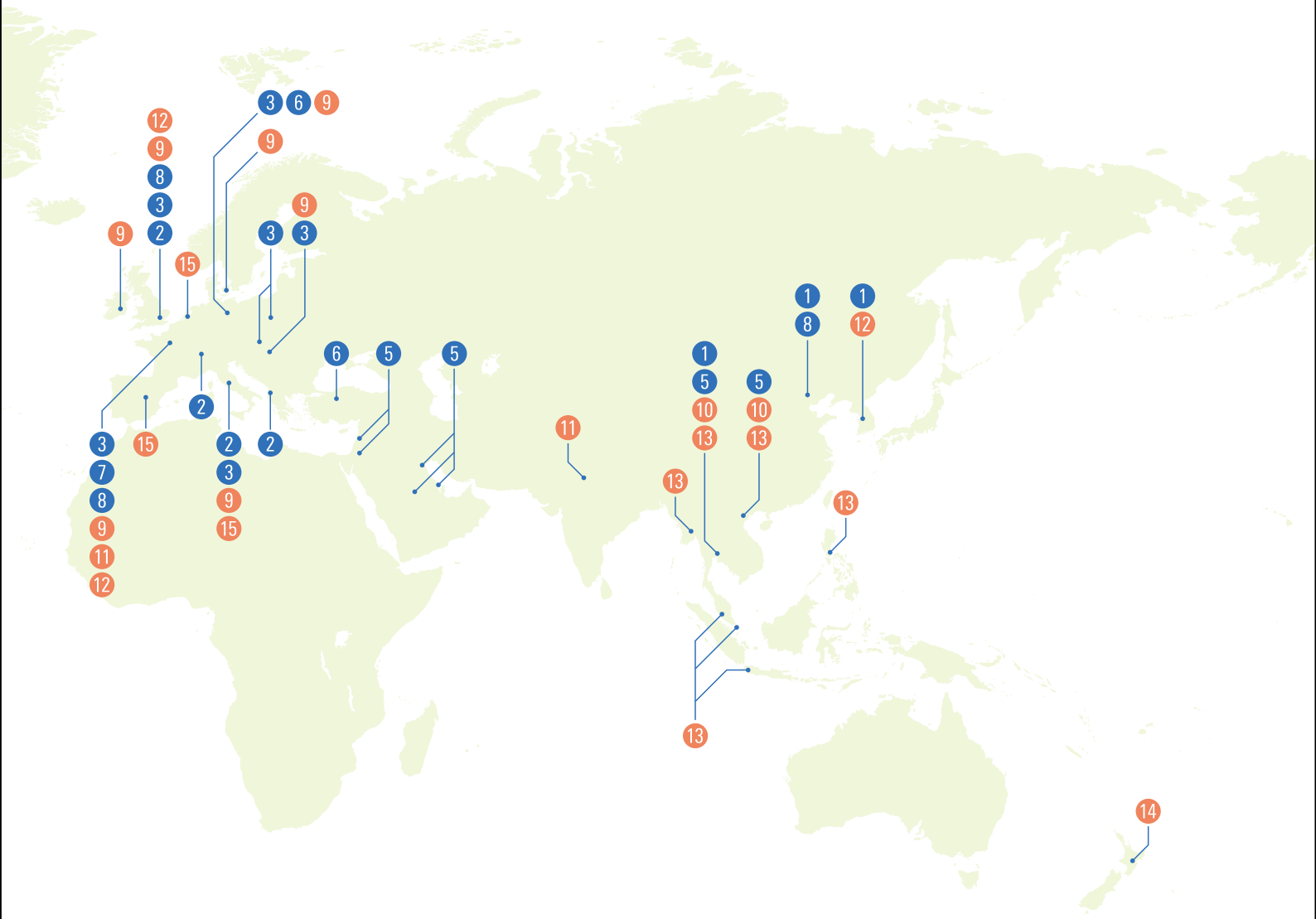
青木 涼子 P.26

柳原 尚之 P.28

文化交流使一覧 P.31

※今回のフォーラムにはご出席されておりません。

文化交流使事業概要　Overview



平成 26 年度　FY2014

1 岡田 利規　Toshiki OKADA
演劇作家，小説家
活動期間　平成 27 年 1 月 12 日～平成 27 年 3 月 2 日
活動国　中国，韓国，タイ

2 櫻井 亜木子　Akiko SAKURAI
琵琶演奏家
活動期間　平成 27 年 1 月 7 日～ 3 月 21 日
活動国　エルサルバドル，ブラジル，アメリカ，イギリス，イタリア，スイス，アルバニア

3 中澤 弥子　Hiroko NAKAZAWA
食文化研究者，長野県短期大学教授
活動期間　平成 26 年 8 月 10 日～ 10 月 13 日
活動国　フランス，ドイツ，ポーランド，ハンガリー，イタリア，スロバキア，イギリス

4 林 英哲　Eitetsu HAYASHI
太鼓奏者
活動期間　平成 26 年 9 月 25 日～ 11 月 4 日
活動国　アメリカ，トリニダード・トバゴ，キューバ

5 林田 宏之　Hiroyuki HAYASHIDA
CG アーティスト
活動期間　平成 26 年 11 月 1 日～ 12 月 14 日
活動国　クウェート，ヨルダン，レバノン，サウジアラビア，バーレーン，ベトナム，タイ

6 平野 啓子　Keiko HIRANO
語り部，かたりすと
活動期間　平成 26 年 11 月 14 日～ 12 月 15 日
活動国　ドイツ，トルコ

7 山井 綱雄　Tsunao YAMAI
金春（こんぱる）流能楽師
活動期間　平成 27 年 2 月 1 日～ 3 月 15 日
活動国　フランス，アメリカ，カナダ

8 若宮 隆志　Takashi WAKAMIYA
「彦十蒔絵」代表
活動期間　平成 26 年 11 月 2 日～ 12 月 3 日
活動国　イギリス，フランス，中国

文化庁では,芸術家,文化人等,文化に関わる方々を一定期間「文化交流使」に指名し，世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や，外国の文化人とのネットワークの形成・強化につながる活動を展開しています。文化交流使は，諸外国に一定期間（1か月～ 12 か月間）滞在し,それぞれの専門分野で講演,講習や実演,デモンストレーションなどを行います。

平成 27 年度までに，伝統音楽や舞台芸術，生活文化やポップカルチャーといった多様な分野で活躍する芸術家，文化人等，延べ 122 人と 2 グループ（5 名），26 組（団体）を 79 か国以上へ派遣しています。平成 26 年度および平成 27 年度は，下記の芸術家，文化人を「文化交流使」に指名しました。

Since 2003, the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan has sent artists and other cultural figures abroad to serve as "Japan Cultural Envoys," with a view to deepening the international community's understanding towards Japanese culture, and to forming and strengthening networks with people around the world active in the cultural arena. The Envoys stay in one or more countries for a specified period (between one month and one year) where they conduct lectures, courses, demonstrations or other activities in their cultural fields.

By the end of fiscal year 2015, a total of 122 individuals, 2 small groups (consisting of 5 people), and 26 larger groups specializing in various fields such as traditional music, performing arts, culture and lifestyle, and pop culture has been sent to more than 79 countries. The following artists and cultural specialists were appointed as Japan Cultural Envoys in FY2014 and FY2015.

平成 27 年度　FY2015

9 青木 涼子　Ryoko AOKI

能×現代音楽アーティスト

活動期間　平成 27 年 6 月 20 日～ 8 月 9 日，9 月 17 日～ 11 月 1 日
活動国　アイルランド，フランス，ドイツ，デンマーク，イギリス，ハンガリー，イタリア

10 小野寺 修二　Shuji ONODERA

コンテンポラリーダンス，マイム，「カンパニーデラシネラ」主宰

活動期間　平成 27 年 12 月 15 日～平成 28 年 1 月 27 日
活動国　ベトナム，タイ

11 畠山 直哉　Naoya HATAKEYAMA

写真家

活動期間　平成 27 年 9 月 2 日～平成 28 年 2 月 10 日
活動国　メキシコ，インド，フランス

12 藤田 六郎兵衛　Rokurobyoue FUJITA

能楽笛方　藤田流十一世宗家

活動期間　平成 28 年 2 月 23 日～ 3 月 30 日
活動国　イギリス，フランス，韓国

13 矢内原 美邦　Mikuni YANAIHARA

振付家，劇作家，近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授

活動期間　平成 27 年 8 月 22 日～平成 28 年 1 月 31 日
活動国　シンガポール，マレーシア，タイ，ミャンマー，ベトナム，アメリカ，インドネシア，フィリピン

14 柳原 尚之　Naoyuki YANAGIHARA

近茶流(きんさりゅうし)家，「柳原料理教室」副主宰

活動期間　平成 27 年 7 月 29 日～ 9 月 20 日，9 月 28 日～ 11 月 8 日
活動国　ニュージーランド，ブラジル，カナダ，アメリカ

15 吉田 健一　Kenichi YOSHIDA

「吉田兄弟」，津軽三味線奏者

活動期間　平成 28 年 3 月 27 日～ 5 月 25 日（予定含む）
活動国　オランダ，スペイン，イタリア等

文化庁文化交流使フォーラム2016
議事録

櫻井亜木子氏によるオープニング演奏

開会挨拶

青柳 正規　文化庁長官

皆様，本日は文化交流使フォーラムにご参加いただきありがとうございます。

本フォーラムは今回で13回目になりますが，これまで，世界各地を訪れ，日本の文化や芸術の素晴らしさをご紹介いただいた，たくさんの文化交流使の方々にご参画いただいてきました。交流使になってくださっている方々は，いずれもトップクラスで活躍しておられるため，訪れた土地で本当の日本の芸術・文化というものを伝えてくださっています。このような文化交流使の役割が大変重要であることは，私自身の経験に照らしても深く感じているところです。

私が大学でフランス語の勉強を始めた頃，文化交流使の取組を盛んに行っていたフランスからコメディ・フランセーズがやってきて，フランス文化会館でバロック時代の劇作家ジャン・ラシーヌの「プチ・ブルジョワ」という劇を朗読してくださいました。もちろん私は何を言っているのかまったく分からず，手元で本を見ながら聞いていたわけですが，その時の印象，バロック演劇の素晴らしさというものが今でも心に残り，フランス演劇に憧れる原点を作っていただきました。おそらく文化交流使として日本から海外へ行かれた皆さんも，赴いた土地で，そのようなファンをたくさん獲得してこられたものと思います。

今日は，先ほど琵琶を演奏していただいた櫻井亜木子さんをはじめ，山井綱雄さん，青木涼子さん，柳原尚之さんという，まさに第一線で精力的な活動を行っている4名の交流使の皆さん，さらにモデレーターとして日本文学研究者のロバート キャンベル先生にもお越しいただきました。

最後に，櫻井さんの素晴らしい演奏を聴きながら感じたことをお話して挨拶を締めくくりたいと思います。イタリアには中世以降続いているコンタストーリア（物語を語る芸能）と，カンタストーリア（物語を歌う芸能）がありますが，櫻井さんの琵琶の技芸の中にはそれら二つが一体となって存在していると思います。こうして，やはり実際にしっかりと演技・表現してくださる方々を世界に派遣することが，違う文化を理解するために必要であるということをつくづく感じました。

これからも文化庁は，この文化交流使派遣事業を積極的に行っていきたいと思いますので，ぜひ皆様のご協力をお願いしたいと思います。

青柳文化庁長官による開会挨拶

講演「待ち人ともてなしと」

ロバート キャンベル
日本文学研究者，東京大学大学院総合文化研究科教授

今回の講演は，今日のメインイベントである文化交流使の皆さんによる活動報告の準備が整うまで，露払いのつもりでお聞きいただきたい。英語に「露払い」という風雅な言い回しは見当たらないが，要は，待たされるわけである。私自身，待つことは年齢と共に苦手になっているが，例えば病院にしても，ラーメン屋にしても日本の皆さんは並ぶことをいとわず，待つことをあまりストレスに感じないようである。考えてみると「待つ」ということは，日本を捉え直し，色々なことを気づかせてくれる厄介な言葉であるかもしれない。そこで今日は，「待ち人ともてなし」について皆さんと一緒に考えていきたい。

あと4年間待つと，2020年には東京にオリンピックがやってくる。「おもてなし」という言葉が話題になったが，お客様を「待つ」こと，「待ち受ける」ことから歓待は始まる。「待」という漢字も，「待機」と「応対」の両方の意味があり，日本語の中では，待ち人が到来する前と後とが一つの流れにまとめられていることがわかる。例えば，昔の文書に出てくる「待賈（たいこ）」とは，「商人」の改まった言い方で，良い品を用意し，見識を高め，その品を認めてくれる人の到来を「待つ」ことに由来する。

一方，文学の中には「待ちたくない」という概念を逆手にとって描いている作品もある。豊島与志雄の短編『明日』（昭和13年）の中で，語り手がある男から「近々あなたの元を訪ねたい」という趣旨の手紙が来ると，うんざりするという話を聞く。今日，アポなしで来るのはいいが，自分も見通しがつかない明日まで待たなければならないのは地獄だというのだ。この男は，来客をこばむわけではないが，「人を待ち受けて，おもてなしをする」ではなく，「来るなら来い，その分おもてなしはしない」という反転させた立場を取っている。

しかし，近代以前の日本人の表現，心の証言を見ていくと，もっと素直に「待つ」姿が美しく描かれることがある。橘曙覧の『独楽吟』は，「何が楽しくて生きているか」をひたすら描き続けた五十二首の歌集であるが，その中に，「たのしみは 野山のさとに 人遇て我を見しりて あるじするとき」という一首がある。見たことはあるが，それほど親しくない人が即座に家へ呼び，もてなしてくれるのがすごく楽しいと。駆け引きもなく，一期一会かもしれないその出会い自体が生きている実感を得る大切なモーメントだというわけである。

ロバート キャンベル氏による講演

上田秋成の『雨月物語』に描かれた「菊花の約」では，宗右衛門が義弟・左門の元へ約束の日に帰れないことが分かると，待ち人を裏切らないために自決し，霊魂となって空を飛んで帰る。そして数時間だけ左門と会い，もてなしを受けて消える。このように「待つ」「もてなす」をキーワードとして見直すと，日本文化の魅力に気づかされる。

ぐっと現代に近づくと，2013年9月8日5時20分，2020年の東京オリンピック開催が発表された。私は，日本中の人々がこの瞬間をどのように迎えたのかと，検索エンジンを使って膨大なデータを集めた。すると，それまで「オリンピックは来ないでよろしい」「7年も待てない」「他に大切なことがある」と言っていた人たちも，5時20分に「トーキョー」と発表された途端，手のひらを返したようにツイッターやブログで「万歳！」と言いはじめた。中には，原発や汚染水，デフレなどの問題を解決する目標期限ができたという声も見られた。期限があることで，「待つ」ことを強い意志に転換しているわけである。さらには，オリンピックを待つ7年間の人生設計をしているツイートもあった。自らコミュニティや社会と結びつき，何かを作っていくのだという熱意のようなものさえ感じる。

おそらく感覚として，時間の捉え方や世界観というものは，日本文化の中で変わるものと変わらないものがある。「待つ」ことも，「もてなす」ことも，その一つのエリアとして考えられるのではないだろうか。

ロバート キャンベル　プロフィール

ニューヨーク市生まれ。ハーバード大学大学院東アジア言語文化学科博士課程修了，文学博士。専門は江戸時代から明治期の日本漢文詩で，それをベースに芸術，思想，メディアなどに関心を寄せている。テレビでMCやニュース・コメンテーターなどをつとめる一方，新聞雑誌連載，書評，ラジオ番組出演等，様々なメディアで活躍中。『ロバート キャンベルの小説家神髄』（NHK出版），『読むことの力』（講談社）などの著作がある。

櫻井亜木子氏

活動報告

櫻井 亜木子　琵琶演奏家

出国が近づくにつれ，改めて「文化交流の持つ意味は何なのだろう」という疑問の渦にはまってしまった。そこで，ある経営者の知人に相談したところ「俺たちは，物作りのプロだけれど文化までは運べない」という回答が返ってきた。そんな大役が私に果たせるのだろうか。「文化運び」に，いよいよプレッシャーを感じた。もしも一文化人として，世界各地で日本文化や日本人の気質を知ってもらうことが，巡り巡って日本経済につながるのだとしたら，その役割はなんて大きいのだろう。それならば，この日本で生まれ育った 39 年間分の自分を丸ごと届けよう。「歩く日本」として，お香が漂うようが如くに自分の全体から日本の雰囲気を味わってもらえればいいと思うようになった。

7 か国を 72 日間，1 人で旅する間，ほぼ毎日演奏をしていた。真夏のエルサルバドル（1 月）から，ブラジルを経て，極寒のニューヨーク（2 月）へ。最終月（3 月）はヨーロッパへと，総移動距離は地球の 4 分の 3 周。衣装も含め大荷物での旅となった。

中南米のエルサルバドルでは，到着間もなく地元テレビに生出演。プログラムには『耳なし芳一』を選んだ。日本語独特の表現を感じてもらうために，途中に朗読も挟んだ。

ブラジルでは『那須与一』を演奏したが，さすがはブラジル。レーザービーム飛び交うカラフルな平家物語となった。ここで出会ったブラジルで生まれた日系 2 世以降の人々は，一度も日本を訪れたことがない方がほとんどだった。だからこそ，琵琶がその血に何を働きかけ，何を動かすのか思いを巡らせ，少しでも心穏やかになっていただければとわらべ歌もお届けした。「今日，あなたが着物で歩く姿を見ただけで，自分が日本人として生まれてきたことに自信を持てた」と語ってくれる女性もいた。

ニューヨークでは，『雪女』をお届けした。コロンビア大学では，日本の梅の香りの話などをするうちに学生たちが噛んでいたガムを出し，背筋を伸ばすなど，和の雰囲気を感じ取ってくれたようだった。

また，各国を訪れると，まず私は教会へ足を運び，琵琶の奉納演奏をさせていただいた。イギリスでは，女性の牧師が「宗教は異なっても，祈る心は一緒でしょうから，好きな時間に来て練習していいのよ」と言ってくれた。在イギリス日本国大使館では，薩摩留学生 150 周年を記念して西郷隆盛の心境を薩摩琵琶にて公演した。

イタリアでは，『敦盛』という子どもが討たれてしまう演目を届けたが，8 か所すべての会場で「私も子どもがいるのよ。日本語は分からなかったけれども，悲しい演奏に私も泣いちゃった」という声が寄せられた。「国境を越えて感動してもらえる」というミュージシャンとして私がもっとも目指すところを叶えられた瞬間であった。イタリア人に涙してもらい本当に嬉しかった。

日帰りで訪れたスイスでは，同じ窮地に立たされたウィリアム・テルにかけて『那須与一』を演奏。ちょうど 3 月 11 日だったため，東日本大震災への支援に御礼を申し上げた。日本を出て 2 か月半。この頃になると，草履がボロボロになってきた。

今回の旅でとくに印象的だったのは，ニューヨーク・国

キャンベル氏によるインタビューに応じる櫻井氏

連本部において10数か国のお客様を前に演奏を終えた際，「あなたの演奏は平和へのメッセージだと感じた。琵琶の音色をもっと世界に届けてほしい」と言われたことである。今まさに自国や隣国で戦争が起き，平和への強い祈りと具体策を求めている地域だからこそ出てきた感想であった。琵琶の音色や和の間合いが人々を安らぎに導けるのであれば，私はその求道者になりたいと強く思った旅であった。

キャンベル　不思議なもので，音楽は言葉を越えて人々の心に入り込み「化学反応」を起こす。琵琶の音色は，人々の心にどのように届いたと感じているか。

櫻井　皆さんに助けていただき「愛」で続いた72日間であった。子を愛するとか，言葉は通じないけれども優しくしてあげるとか，そういう根底の部分は，やはり一緒だと思った。そこに聞いたことのない音色が加わることによって，まさに「化学反応」が起こり，新しい何かが生まれればいい。そこで何が生まれたのか，また琵琶を背負って確かめに行きたい。

キャンベル　現地の食べ物を受け入れ，毎日飲み込みながら音色を奏でていく中で，何らかの変化は感じたか。

櫻井　食生活が変わったことで，おそらく音色も変わったと思う。いい刺激になることもあれば，音が飛んだり跳ねたり元気になりすぎないように配慮する必要もあった。演奏の際は，琵琶本来の落ち着いた弾き方ができるよう自分の中で切り替えていた。

キャンベル　教会での奉納演奏は，どのような発想から始めたのか。

櫻井　もともと琵琶は，お経の伴奏楽器でありレクイエムの要素を持っている。そのため私は，琵琶奏者として鎮魂の場へ行かなければいけないと思った。

キャンベル　最後に，未来の文化交流使に向けてメッセージを。

櫻井　怒ったりイライラしたりせず，いい「気」で活動を行うこと。あとはパスポートがあれば何とかなる。お草履の替えを持って，いい「気」で旅をしてほしい。

青木 涼子　能×現代音楽アーティスト

今回の文化交流使の活動期間中，能からインスパイアされた新しい音楽作品や舞台作品を生み出していくために，欧州の作曲家，オペラ演出家との共同制作や情報交換を実施した。現地での活動報告の詳細をお伝えする前に，まずは「能と現代音楽」という私の活動分野について説明したい。

世阿弥は，「花伝第七別紙口伝」において「住せぬは花なり」という言葉を残している。これは，定住することなく新鮮であり続けよという意味である。現在日本では，新しい創作としてはダンスや演劇が主となり，伝統演劇から新しいものを作るという流れはなかなか見られない。一方，欧州では，クラシック音楽の伝統の先に現代音楽があり，オペラや演劇は新解釈によって常に見直されている。しかし日本では，それぞれの文化をそのまま残すことが重視され，古典を咀嚼した新しい文化の提示にはそれほど積極的でない。

1960～70年代に能楽師・観世寿夫氏が他分野とのコラボレーションを積極的に行ったこともあった。しかしその大半は現代音楽にあわせて能を舞うというもので，その他の邦楽器に比べ音楽的にそこまで密な作品は生まれてこなかったように思う。この背景には，シテ方が務める音楽部分の謡（うたい）は西洋の声音楽のように五線譜にあらわせるものではなく，謡本をもとに，全て師匠からの口伝で学ぶという特徴が挙げられる。こうしたことを受け，前例のない，能の謡のための音楽作品を作りたいと思うようになり，「能と現代音楽」という分野で活動を始めた。

2010年より，能と現代音楽の新たな試みとして世界の作曲家に委嘱するシリーズを始め，3年間で計15曲の新曲が生まれた。作曲家の国籍は日本のみならず欧州の作曲家が多い。2013年には，マドリッド（スペイン）のテアトロ・レアル王立劇場において，オペラ『メキシコの征服』（ヴォルフガング・リーム 作）のマリンチェ役で出演した。マリンチェは身体表現で通訳をする役で，日本の能役者そして女性であることからキャスティングされた。この作品は日

青木涼子氏

キャンベル氏によるインタビューに応じる青木氏

本文化のコードの不可解さを利用した演出であったと思う。異文化に入ると，それまで通用していたものがまったく通じなくなる。日本の中では通じていた記号も，外へ出ると誤読や誤解が出てくる。しかし，新しい芸術とはそこから生まれてくるのではないか。今の日本では，すぐに「これが正統な伝承だ」などという議論になるが，素晴らしい芸術が誕生する裏には，常に誤読がつきまとうものだと思う。私は，そこを恐れずにやっていきたい。

ここから活動報告に移りたい。昨年6～8月，9～11月に欧州で文化交流使の活動を行った。活動の柱に据えたのは，「Meeting Composer」（作曲家に会う）と題し，私が今後作品を書いてもらいたい作曲家に公開プレゼンをするという企画である。パリ日本文化会館（フランス）では「能×現代音楽 パスカル・デュサパン氏を迎えて」を開催。反響は大きく，最大限の成果を生み出すことができたと思っている。ハンガリーでは，「能×現代音楽 ペーテル・エトヴェシュ氏を迎えて」の他，リスト音楽院でのレクチャーも行った。ドイツでは，ケルン日本文化会館で「能×現代音楽 細川俊夫氏を迎えて」を実施した。また，作曲家だけでなくオペラ演出家とのミーティングも実現し，ベルリンの在ドイツ日本国大使館において，来期ミラノ・スカラ座でデビュー予定の若手イギリス人演出家フレデリック・ウェイク＝ウォーカー氏とのワークショップの成果発表およびトークイベントを行った。その他，アイルランド，デンマーク，イギリス，イタリアに赴き，100日間の文化交流使の活動を終えて帰国した。今回，文化交流使に指名していただいたおかげで日本のメディアにも取り上げられ，国内での上演の機会も増えている。今後も日本の伝統から新しい芸術を生み出していくよう，頑張りたい。

キャンベル　作曲家たちに委嘱して曲を生み出すというプロジェクトは，どのような発想から始めたのか。

青木　日本の伝統を使った新しいものはないかと考えると，なかなか日本の文化そのものを使った人がいなかった。日本の技術を持つアーティストによるモダンな作品を作りたいと思った。

キャンベル　歌舞伎や人形浄瑠璃では女性が舞台に立てないなど，日本の古典芸能に性差や男女の役割分担があることについて，海外の理解を得るのは難しいと思う。とくに意識することはあるか。

青木　あまり考えてはいないが，作曲家から見ると低い女性の声は珍しく，それだけで創作意欲が湧くようだ。

キャンベル　では，未来の文化交流使にメッセージを。

青木　日本の伝統から新しいものを生み出すには，伝統を正しく理解し，知ることが大事。それに世界のアーティストがインスパイアされ，新しいものが生まれることが面白い。ぜひ皆さんに，もっと日本の文化を知っていただきたいと思う。

柳原 尚之　近茶流家（きんさりゅうしか），「柳原料理教室」副主宰

私は普段，東京・赤坂で父と共に伝統を踏まえた日本料理を教えている。今回，文化交流使に任命されてから，どうしたら海外の方々に本物の料理を感じてもらえるかと悩み，そして，実践してきたことを報告する。

2013年，ユネスコ無形文化遺産に和食が選ばれた。その背景には，食材の豊かさ，健康的な食生活，季節感，年中行事と食文化の密接な関わり合いといった四つの柱がある。そこで「Washoku for All －和食を世界に－」というプロジェクトを立ち上げ，文化交流使としての3か月強の旅で，主に料理人を目指す若い人たちに本物の和食に触れてもらう活動を行った。ニュージーランド，ブラジル，カナダ，アメリカで28講義を行うために，日本から持って行った食材

柳原尚之氏

や器などは，スーツケース４個と段ボール３個と大荷物となった。

ニュージーランドでは，オークランド工科大学やウェリントン工科大学などで講義を行った。日本と異なり，海外の多くの国では，大学で調理学を専攻することができ，調理以外にも経営学や栄養学，植物学なども含めて総合的に学ぶことができる。こうしたシステムができていることに大きな感銘を受けた。

オークランド工科大学では，３日間コース（座学・実演・実習）を実施。学生たちは真剣で，４時間の講義の間も誰一人として集中が切れている人はなく，いかに皆が日本料理を求めているかという熱意を感じた。作り方だけではなく，盛りつけの仕方や器の置き方・扱い・洗い方についてまで丁寧に教えた。ニュージーランドは日本と同じ島国のため，カサゴ，マトウダイ，マダイなど鮮度のよい魚が手に入る。同じ太平洋でつながっているためか，魚の顔つきが日本と同じで味もおいしい。

ブラジルには日系の方々が多く，野菜には困らなかった。きゅうり，大根，ごぼうなど何でも手に入る。日本から移住した先人たちに感謝するとともに，母校である東京農業大学の先輩たちがブラジルへ渡り，日本の技術を使って花や野菜を作っていることを知り嬉しく思った。日系の方々が作って食べている和食は，現地の気候に合わせて甘い味だが，枝葉として分かれてきた「ブラジルの日本料理」と呼んでいいのではないかという気持ちになった。一方で私がブラジルを訪れ，枝葉ではない本来の日本料理を見せ，食べさせるという入口を作ることができたのは，意義深いことだと思う。

「年中行事と食文化」への関心の高さもブラジルの特徴だった。一生食べ物に困らないようにとの願いを込めた生後100日目のお食べ初めの習慣や，おせち料理の三ツ肴（数の子：子孫繁栄，黒豆：健康，田作り：豊作）などの話をすると，嬉しそうに聞いていたのが印象的であった。

紅葉の美しい時期に訪れたカナダのジョージブラウン大学は超実践的で，私がゲストシェフとしてアジアクラスの実習で教えていると，驚くことに学生たちは作った巻きずしをそのままパック詰めし，カフェテリアで販売していた。オタワの在カナダ日本国大使公邸では，カナダの松茸やロブスターで土瓶蒸しを作った。料理を提供しながら，四季の食材とともに盛り付けや室礼，器をうまく使って「季節感」を伝えることをお話しした。

アメリカ合衆国では，カリナリー・インスティテュート・オブ・アメリカのハイドパーク校，ナパ校で講義を行った。その際に行った「二つのだしの飲み比べ」を，ここでキャンベルさんに試していただきたい。（キャンベル氏による飲み比べを実施。）同じ昆布，同じ鰹節を使っても，硬水と軟水でだしの味が大きく違うことがお分かりいただけると思う。水が変わるだけで，日本料理の味は変わってしまう。そのため日本料理人は，海外へ行くとまず水を探すのである。

文化交流使を終えて，気づいたことが二つある。まず，日本人自身がもっと海外の教育現場へ行き，日本料理を教える機会を増やすべきだということ。アジア料理の一つではなく「和食」として教える必要がある。もう一つは，日本でも大学で料理を学ぶことができるようにすること。和食学，調理学で学位を取れるようにすることで，調理だけでなく歴史や膳組，文化的な背景などを体系的に学び，日本料理の教育の充実を図っていくことである。

キャンベル　実際に試飲してみて，軟水の方は味がまるく，まろやかで，硬水の方はシャープだった。水が変わると味はこんなに変わるものかと納得した。現地の水を使わなければならない時はどうするのか。

柳原　水の違いはだしの出方の違いにつながる。軟水でとったおいしいだしがあれば，実際料理は簡単になる。海外でいい水が手に入らない時は，照り焼きなどの濃い味付けにし，現地にフィットさせる。

キャンベル　海外を実際に回って，和食ブームはどのような状況であったか。

柳原　海外の人々は，インターネットを介して日本の情報

だしの飲み比べの様子

をよく知っている。しかし例えば昆布に触ったり，香りを感じたりすることはインターネットではできない。実際に食材や器などに触れる，または日本に来てもらうことが必要だ。

キャンベル　Facebook の反響が大きかったそうだが。

柳原　文化交流使の活動中の 3 か月間で「いいね！」が 2 万 5000 件に上った。友人である安藤卓が写真を撮り，英訳も添えて発信してくれた。ブラジルからの反響がとくに大きかった。現代だからできる発信の方法を試すことができたのはよかった。

山井 綱雄　金春（こんぱる）流能楽師

私は 5 歳で初舞台を踏み，12 歳でシテを務めた。祖父が金春流能楽師だったため，知らぬ間に能楽の世界に足を踏み入れ生きてきた。様々な恩師との出会いの中で，今日まで能楽師としての道を歩んできた。現在，能の世界はある種危機的状況にある。能楽愛好者が減少し，「見たことはないけど，守られた世界で誰かがやって，伝えていくのでしょう」と考えている人も多いようだ。私自身，能の中でどっぷり生きてその道を究めたいと思っているが，それだけではもう立ちゆかないという現実を前に，自分が能楽の世界の扉を開かなければならないという強い思いを持つようになった。こうした背景の下，2003 年から洋楽・邦楽を問わず多ジャンルのアーティストとのコラボレーションを始め，海外を訪れる機会も増えた。その流れの中で今回，文化交流使を拝命することになったのである。

能楽・金春流は，能楽最古の流派で聖徳太子の時代から 1400 年の歴史を刻んできた。初代は秦河勝という渡来人である。長い歴史の中で培ってきたものを後世に伝え，滅ぼさないためにどうすればいいのか。能をガラスケースの中の過去の遺物にすることなく，今そこにいる「あなた」に伝えたい，心に響くメッセージが能にはある。それを伝えるための文化交流使の活動だったと考えている。

2015 年 2 月 3 日，パリ日本文化会館（フランス）で講座を行った。折しも，日本人ジャーナリストの後藤健二氏が殺害されるという痛ましい事件の直後であったため，バスティーユ広場は献花に訪れ，お祈りをする人が後を絶たなかった。市内にはフランス軍が銃を構えて歩いていた。その中で私は，日本文化を通じて世界に伝えることのできるメッセージや，能楽を通して現在に伝えるべき何かがあるのではないかと強く感じた。

同年 2 月 8 日にはニューヨーク（アメリカ）を訪れ，謡と舞を体験していただくワークショップを開催。バーモント州ミドルベリー大学では，擦り足などの所作を学生たちが熱心に取り組んでいた。声を地から響かせ，腰を落とすという概念は，農耕民族である日本人独特の「大地と一体化する」という意識から来るもので，相撲や歌舞伎も通ずるところがある。そのような話をしていると，予定の時間を超過しても誰一人席を立つことなく，集中のあまりスマートフォンで撮影する学生がいなかったことに教授が驚いていた。オレゴン州ポートランドでは，ピアニスト木原健太郎氏とのライブを行った。

アメリカ大陸を北上し，ヴィクトリア・バンクーバー（カ

山井綱雄氏

ナダ）では「繋ぐ～多次元を～特別デモンストレーション」を実施。この作品は，これまでのコラボレーションの経験や５歳から学んできた金春流の能のすべてを総動員して作り上げたものである。カーテンコールではお客様が総立ちで拍手喝采を送ってくれ，一生忘れることのできない景色となった。

2015年３月７日，バンクーバーにおいて現地在住の作曲家ファシード・サマンダリ氏による能オペラ『通小町』を上演。また，サイモンフレーザー大学で謡・仕舞稽古を５日間行った後，在バンクーバー総領事公邸で日本・カナダ合同発表会を実施。現地に愛好者の息吹を植えつけることができたと思う。

「モノの時代」から「ココロの時代」へと世界的に変化を遂げている中で，能には「ココロ」を伝えるための大切なヒントがある。間を大事にする。余白を大事にする。そういう日本独特の目に見えないものを大事にすることが，これからの時代に注目されるのではないか。能は，大陸からの文化・芸術・宗教と，日本古来の文化・芸術・宗教が混然一体となり，濃縮されている。能は神も仏も登場する。能の伝える「ココロ」とは，違うものを受け入れて成立している。この「多様性の享受」「共存共栄」こそが，能を通じて私が世界の人々に伝えたかったことである。能を通じて「ココロ」を伝える活動を今後も広く続けていきたい。

キャンベル　日本では，能は研ぎ澄まされて近寄りがたいイメージがあると思うが，海外の人々は食いつくように集まっている。それが日本へ逆流し，いい風を送り込むような可能性を感じた。

山井　おっしゃる通りだと思う。この文化交流使の活動を通じ，今まで考えなかったことを考えるきっかけをいただいた。東京オリンピック開催に向けて追い風が吹く中，世界各国をまわりまわって，最後は日本の方々に自国の素晴らしさを理解してもらえればと思う。

キャンベル　文化を運ぶ一方通行で終わるのではなく交流が大事。文化交流使の旅から帰ってきて，どのような変化があったか。

山井　文化交流使としての経験を通し，自分が伝えるべきことを改めて意識し，それを言葉で伝えていくことが大事だと感じた。

キャンベル　文化を一つのツールとして交流する上での心構えなど，メッセージをいただきたい。

山井　心に響くものを素直に感じてほしい。アートは鏡。オーディエンスの心や魂が映し出されているという意識で見ると，同じものでも年齢が変われば全然違うものに感じる。

能のデモンストレーションを行う山井氏

トークセッション

キャンベル　４人の文化交流使の皆さんは，分野のみならず活動内容をみてもそれぞれに特徴があり，非常に興味深い活動報告だった。櫻井さんは着物をはじめ竹や和紙，柳原さんは器など，環境全体を感じさせるものを海外へ持っていかれたようだ。そういったものを使い，臨機応変に現地でコラボレーションできるのは大事なことだと感じた。

山井　私たちの世代の特徴でもあると思うが，そのままではなくジャンルを超えてアレンジし，伝えやすいような創意工夫が加えられている。それぞれ見ていて非常に面白い。

柳原　聴講に来る方々の知識が，どの程度のレベルかによっても違うと思う。例えば，日本料理には，茶懐石のようにわびさびを重んじる料理がある一方，料理屋さんの懐石のように華やかな料理もある。すると，だんだん分かってくる海外の人が「茶懐石はこうじゃないよね」と言ってきたりもする。

キャンベル　日本の文化を啓蒙し，教えるために妥協する部分と貫くべき部分があると思う。活動を通して気づかれた，お考えになったことはあるだろうか。

青木　自身の「能×現代音楽」という領域は，いわゆる伝統芸能ではないので，ただ行って，お見せするだけでは伝わらない。プレゼンを交えることで，お客さんが納得してくれると感じた。

櫻井　妥協というよりも順応。たとえば，やむを得ずマイクを使うのであれば，自分が本来伝えたい琵琶の間合いや絹弦の音色を伝えるには，どういう効果がもたらされればいいかを考えた。エルサルバドルの劇場は大きかったが，

出演者全員によるトークセッション

琵琶の音色や雰囲気を近くで感じてもらいたかったので，お客さんに舞台へ上がってもらった。間近で聞いてもらったことで化学反応が起きたと思っている。

柳原　料理も実はエンターテインメントである。買い物から始まり，献立を決め，料理をして器を考えるという意味で，総合芸術といえる。すでに海外では，料理がアートの一つとして考えられており，日本もそこまで行く必要があると感じた。

山井　生きたものとして，能を次世代に伝えていきたいと考えている。青木さんのように世界のアートとして表現するのも，能がこれから生きていく新しい道だと思う。アメリカの大学で，私が「おそらく君たちはアメリカの中枢を担っていく人材でしょう。今日見て感じたものが，君たちのこれから進むべき人生において何かのヒントを与えることができたならば，とても嬉しい」と話したところ，学生たちが立ち上がってワッと拍手を送ってくれた。実際に見せ，五感で感じさせることで伝わるものがあると思う。

キャンベル　感性・感覚の共有が大事なのだと思う。その時に何を身につけたかということ以上に，それがどのように増幅し，あるいは波及していくのかということが大切なのだろう。

最後に，2020 年の東京オリンピックを念頭に置き，コメントをいただきたい。

櫻井　東京オリンピックまでの限られた時間に，どれだけ関係を紡いでいけるか。そしてオリンピックを迎えた日，世界中の人々と感性の共有ができればいいと思った。自分自身はこれからも，草の根運動をしていきたい。日本そして世界へ，琵琶を担いで行くしかないと思っている。

青木　オリンピックに向け行事や建設が盛んに行われているが，2020 年には，日本が文化立国になっていてほしいと思う。文化はすぐに形になって見えるものばかりではないが，そうすれば世界が尊敬できる日本になれるのではないか。

柳原　まず，日本料理をやっている家に生まれてよかったと思う。もしフランス料理やイタリア料理だったら，その国へ行かなければ本当の勉強できない。しかし，日本の文化，日本の料理を勉強するには，日本が一番である。2020 年には多くの人が海外から訪日し，日本の風土や空気を感じながら日本料理を食べることで，今度は日本料理文化の大使となって自国へ戻って広めてくれる。最終的には，そういった人々を受け入れる英語の料理教室などをしていきたい。

山井　皆さんと同じ思いを持つと共に，2020 年後にどうするかということも考える必要があると思う。オリンピックは，日本人が「日本人の素晴らしさって何だろう」「日本人の心って何だろう」ということを思い出すチャンスである。世界中から大勢の方々を迎え入れながら，新しい日本の心，文化，風景を私たちが作っていく時だと思う。私たち一人ひとりがその自覚を持ち，2020 年を迎えていきたい。

キャンベル　今日は，文化交流使の皆さんから含蓄ある旨みたっぷりの話を聞き，日本の文化が世界とどのように結び合うべきかという方向性を示していただいたと思う。大きな拍手を送り，本フォーラムを締めくくりたい。

活動報告

プロフィール
Profile

©Kikuko Usuyama

岡田 利規

演劇作家，小説家

1997 年に演劇カンパニー「チェルフィッチュ」を結成し，以来，全作品の脚本と演出を務める。その独特な言葉と身体の関係性を用いた手法により従来の演劇の概念を覆すとみなされ，国内外で注目される。常に方法論を更新し続け，2012 年『現在地』以降はフィクションへの探求のもと創作に取り組む。国内大学でのワークショップやレクチャー等，講師歴も多数。2016 年よりドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシュピーレのレパートリー作品の演出を 3 シーズンにわたって務めることが決定している。

櫻井 亜木子

琵琶演奏家

東京音楽大学在学中，薩摩琵琶を田中之雄氏に師事。日本琵琶楽コンクール優勝後，インドネシア，ハンガリー，カナダ，中国を含む多くの海外公演に参加。多くのミュージシャンとのコラボレーションにも積極的に取り組み，小椋佳全国ツアーへの参加，NHK BS 番組「関口知宏 音楽で旅するメープル街道」に同行。多数のテレビやラジオに出演，全国の学校公演や，鹿児島県にて薩摩琵琶を教える活動も行っている。

Toshiki OKADA

Director / Writer / Novelist

Has been writing and directing all plays for the theater company “chelfitch” since its establishment in 1997. His unique technique using the relationship between the body and wording is regarded as overturning the conventional concept of drama, attracting attention at home and abroad. He has been updating the methodology constantly. Since “Genzaichi (Current Location)” in 2012, he has been working on creation, pursuing fiction thoroughly. Repeatedly given workshops and lectures at domestic universities as a lecturer. Scheduled to direct their repertory productions for three seasons from 2016 at Münchner Kammerspiele, one of the prestigious public theaters in Germany.

Akiko SAKURAI

Biwa Player

Studied Satsuma Biwa under Biwa player Yukio Tanaka while attending Tokyo College of Music. After winning a competition hosted by *Nihon Biwagaku Kyokai* (Japan Biwa Music Association), joined many overseas performances including in Indonesia, Hungary, Canada, and China. She has also been active in collaborating with other musicians on various occasions, including a Japan tour of Kei Ogura (Japanese singer and composer) and a national satellite TV program “*Sekiguchi Tomohiro Ongaku De Tabisuru Maple Kaido*” (Music Trip along Maple Leaf Route, with Tomohiro Sekiguchi). Also appears on many other TV and radio programs, and at schools across the country, and teaches Satsuma Biwa in Kagoshima Prefecture.

山井 綱雄

金春流能楽師

1973年横浜市出身。79世宗家故金春信高，80世宗家金春安明に師事。能楽師であった祖父の影響で，5歳で初舞台。以来，『道成寺』『翁』『安宅』等の数々の大曲を披演。1400年の歴史を持つ能楽最古の流派・金春流の宗家直弟子として，全国にて能楽公演・学校普及公演・講演会を多数開催。洋楽・邦楽他ジャンル芸術家との競演・創作作品多数。能楽公演，能オペラ共同制作，現代演劇参加等，海外各地での様々な普及にも尽力。

青木 涼子

能×現代音楽アーティスト

東京藝術大学音楽研究科修士課程修了（観世流シテ方専攻）。ロンドン大学博士課程修了。世界の主要な作曲家と共同で，能と現代音楽の新たな試みを行っている。2014年，CD「能×現代音楽」リリース。世界各地の音楽祭に多数招待され，2013年には，マドリッド，テアトロ・レアル王立劇場にG・モルティエのキャスティングの下，W・リーム作曲オペラ『メキシコの征服』（P・オーディ演出）のマリンチェ役を好演。あいちトリエンナーレ2016参加アーティスト。

柳原 尚之

近茶流嗣家，「柳原料理教室」副主宰

1979年生まれ。東京農業大学で発酵食品学を学ぶ。醤油メーカーや海外の帆船での勤務後，現在は，近茶流宗家の柳原一成氏とともに，東京・赤坂にある料理教室で，日本料理，茶懐石の研究指導にあたる。また，2009年から5年間，東大寺の「修二会（お水取り）」で，「練行衆」に精進料理をつくる「院士（いんじ）」をつとめた。その他に著書や講演会を通して，江戸時代の食文化の研究継承や子供達への食育にも力を入れる。

Tsunao YAMAI

Noh Actor in Komparu School

Born in Yokohama, Japan, in 1973. Studied under the 79th *sōke* (head) of the Komparu School of Noh, the late Nobutaka Komparu, and the 80th *sōke*, Yasuaki Komparu. Made an early debut at the age of five, inspired by his grandfather who was also a Noh actor. Since then, he has performed in many grand-scale plays such as "*Dōjō-ji Temple*," "*Okina*," and "*Ataka*." As a direct disciple of the *sōke* of the oldest Noh school in the country, with 1,400 years of history behind it, he has been active in performing Noh at various venues across Japan, including schools, and also in promoting Noh dramas through lecturing opportunities. His collaboration with artists of different genres has resulted in many hybrid performances and new original productions. Noh opera, contemporary plays, and overseas performances are among the many activities in which he has been involved, in order to promote the world of Noh.

Ryoko AOKI

Noh Performer

Completed a Master's Degree Program in Traditional Japanese Music at the Graduate School of Music, Tokyo University of the Arts (specialized in main roles of Kanze school of Noh) and a Doctorate Degree Program at the University of London. Has been making new attempts for collaboration of Noh and contemporary music jointly with leading composers of the world. Released a CD titled "Noh × Contemporary Music" in 2014. She has been frequently invited to music festivals held throughout the world. She was highly esteemed for playing the part of Malinche in Wolfgang Rihm's opera "The Conquest of Mexico" casted by Gerard Mortier (directed by Pierre Audi) at the Teatro Real de Madrid in 2013. She is a nominated member artist for Aichi Triennale 2016.

Naoyuki YANAGIHARA

The School of Kinsa, Yanagihara School of Traditional Japanese Cuisine

Born in 1979. Studied fermented food science at Tokyo University of Agriculture. After working for a soy sauce manufacturer in Japan and a sailing vessel overseas, he now researches and teaches Japanese cuisine and *Chakaiseki*, dishes served before the tea ceremony, at a culinary school in Akasaka, Tokyo together with Kazunari Yanagihara, the *sōke* (head) of Kinsa ryu the school of Kinsa. For five years from 2009, he worked as "*Inji*" to cook Buddhist cuisine using only vegetables for "*Rengyoshu*" monks serving in the event called "*Shuni-e*" (Water Ceremony) held at Todai-ji Temple. Through his books and lecture meetings, his research focuses on the continued study of culinary culture in the Edo period, as well as dietary education for children.

©Kikuko Usuyama

岡田 利規

演劇作家，小説家

活動期間　平成 27 年 1 月 12 日～平成 27 年 3 月 2 日
活動国　中国，韓国，タイ

Toshiki OKADA

Director / Writer / Novelist

Period of the activities:　From January 12 to March 2, 2015
Countries visited:　China, Korea and Thailand

想像力の条件を得る

私は文化交流使として，1 月半ばから 3 月はじめまでの 2 か月弱，中国・韓国・タイを訪れました。中国は初めて行きました。私の中に「東アジア」というフレームで何かを考えることができるためのごく初歩的な条件が，中国を訪れたことによってインストールされたような気がします。

北京のペンハオ劇場で 2 日間にわたって行われたイベントは有意義でした。観客たちの熱い好奇心に触れ，私も，そして劇場側も，作品を映像で紹介するだけでは物足りない，実物をもってきて北京の観客に実際に見てもらいたい，という強い意欲をかき立てられました。遠くない将来，必ず実現したいと思います。

ソウルでの 1 か月は，約半年後の 9 月に初演を行った『God Bless Baseball』という日韓合作の舞台作品のリハーサルにいそしむ日々でした。最終日にショーイングも行い，その後の作品づくりに大いに役立ったフィードバックも得ました。

韓国にはそれなりに長い期間滞在できたため，日本と韓国の政治的・歴史的な関係をめぐるさまざまなことをこれまで以上に深く考えるための契機ともなりました。

韓国 光州にて，アートを学ぶ学生とのディスカッション
Discussion with students learning art in Kwangju, Korea

中国 北京のペンハオ劇場にて，演出家の李建軍氏とのトーク
Talking with Mr. Li Jianjun, director, at Penghao Theatre in Beijing, China

その具体例を一つ挙げます。中国にいたとき，自分を東アジア人とアイデンティファイするという新しいビジョンを得たように思いました。けれどもそのビジョンは韓国でクールダウンしました。なぜなら韓国では，自らを東アジア人とアイデンティファイしようとする日本人というのは，日本人であることによって韓国に対して負うべき責任から逃れようとしているように見られるからです。このプロセスすべてが私にとって非常に大きな経験だったのです。

タイのバンコク郊外の，ピチェ・クランチェン氏のダンスカンパニー所有の野外劇場でコラボレーションによるパフォーマンスを作りかつ上演することができたのも，非常によかったです。一昨年神戸で行ったパフォーマンスよりもブラッシュアップできました。

東アジアというフレームで機能するために仕事する。そういうことを想像できるようになるために必要な経験を，多く得られた 2 か月でした。とても貴重なものを得たのですから，今後も活かしたいものです。

Motivated to Make Full Use of My Imagination

As a Japan Cultural Envoy, I visited China, Korea and Thailand from mid-January to early March in less than two months. This was my first visit to China. During my stay there, I felt as if I had been imbued with the fundamental spirit to enable me to think about things within the framework of "East Asia".

The event organized at Penghao Theatre in Beijing for two days was really meaningful to me. The passionate curiosity shown by the audience to our filmed plays fueled my motivation to present our actual productions in front of a live audience in Beijing. I would like to realize it absolutely in the near future, involving the theatre itself that reacted in the same way.

I spent one month in Seoul working hard on the rehearsal of a stage production titled "God Bless Baseball," which was collaboration between Japan and Korea, toward the premiere in September about six months later. We showed the performance on the last day, and I received very useful feedback for creating new plays after that.

The considerably long stay in Korea worked as a good opportunity for me to think more deeply than ever before about various things regarding the political and historical relationships between Japan and Korea.

I will give you one example. I felt as if I had gained a new vision to identify myself as an East Asian while I was in China.

韓国 ソウルにて，新作の公開リハーサル
Open rehearsal of a new play in Seoul, Korea

However, that vision was suppressed in Korea. This is because in Korea a Japanese person who tries to identify himself/herself as East Asian is regarded as trying to escape from the responsibility he/she should assume for Korea as a Japanese national. This entire process was a great experience for me.

I really enjoyed collaborating with Mr. Pichet Klunchen in the creation of the performance presented at an open-air theater owned by his dance company outside Bangkok, Thailand. I could brush up my skills further in this performance compared to that created in Kobe two years ago.

Working or writing plays to be shared under the framework of East Asia—I acquired so much experience in these two months that I can now envisage realizing it. As I gained something very valuable, I would like to make good use of it from this point forward.

タイ バンコクにて，ワークショップに参加した学生と
Together with students attending the workshop in Bangkok, Thailand

タイ バンコクにて，コラボレーション作品の公演
Performance of a collaborative production in Bangkok, Thailand

櫻井 亜木子

琵琶演奏家

活動期間　平成 27 年 1 月 7 日～ 3 月 21 日
活動国　エルサルバドル，ブラジル，アメリカ，イギリス，イタリア，スイス，アルバニア

Akiko SAKURAI

Biwa Player

Period of the activities:　From January 7 to March 21, 2015
Countries visited:　El Salvador, Brazil, the United States, the United Kingdom, Italy, Switzerland and Albania

文化交流使とは

中南米では『耳なし芳一』を，NY では『雪女』
Performing "*Miminashi Hōichi*" (Hōichi the Earless) in Central and South America, and "*Yuki Onna*" (The Snow Woman) in New York

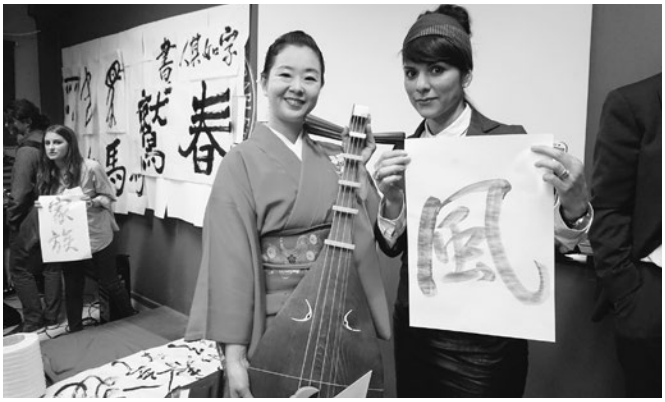
文化交流使をお引き受けしてから，「文化交流の持つ意味とは？」という言葉が常に頭を駆け巡っていましたが，ある経営者の方から「俺たちは物作りのプロ。でも文化までは運べない。」という言葉を頂きました。日本文化に裏打ちされた高性能の技術や製品ではなく，「文化を運ぶ」とはどういうことなのか。文化を届けることで日本人の気質や日本そのものを知ってもらい，そのことが物流や経済に繋がるのだとしたら，一文化人としての自分の役割は大きい。それを意識しながら，自分なりの文化交流を突き詰めていけば，より深みのある人生を歩むことができるのかもしれない。そんなことを考えながら活動に励みました。

プログラムは，怪談『耳なし芳一』。日本独特の旋律で貧しかった時代背景が聴いてとれるわらべ歌。平家物語の『祇園精舎』の解説から現地の方々は琵琶の侘寂をどう感じるか，やってみるしかない。乾電池式キャンドルに赤い敷物，行灯に，和紙と墨汁で般若心経を書いて設置，ライトは暗く青光で。舞台もなるべく和風となるよう演出に心を砕きました。また，着物や帯の話や，草履には右左がないなど，今では「エコ」として語られる先人の知恵についてもお伝えしました。

活動中は印象的な出会いが沢山ありました。ブラジルで，戦争のため二度と日本の土を踏めず苦労した親を見て育った方々が「我々は日本人だが日本を知らない。しかし貴女の歌・着物で歩く姿を見て『日本』を感じた。行くことは難しいけど，今日はありがとう。日本人に生まれて良かった。」と声をかけてくださったこと。ニューヨークでは，国際連合日本政府次席代表の主催するパーティーで，約 16 か国の方々から口を揃えて「琵琶は平和へのメッセージであると感じた。鎮魂の音色を世界に届けてほしい。」と，自国や隣国で戦争が起きているがゆえの感想を頂いたこと。また，欧州では，「悲しいお話を歌ったんでしょう？私も何だか泣いちゃったわ。」という感想もありました。音楽家にとって「訳もわからず感動した。」と言われるほど嬉しいことはありません。

インターネットや CD の中ではなく，目の前で演奏する私は，「歩く小さな日本」であり，「直接会うこと」で，その個体からまるでお香が漂うが如き存在でなければならない。今回の活動では，現地の方々にそれを感じてもらえたと思います。例え草の根運動であっても，歩みを止めず，演奏し続けなければいけないと，強く強く感じた旅でありました。

ここに全ての皆様へ，感謝を申し上げます。



わずか 30 余年前まで日本と国交のなかったアルバニア。アルバニアっ子は日本大好き
Diplomatic ties between Japan and Albania were established only 30 years ago. Many Albanians love Japan.

What Is a Cultural Envoy?

There was a question constantly running through my head after I began serving as a cultural envoy: "What is the purpose of having cultural exchanges?" Then one day, a business owner I met pointed out, "We make products professionally, but culture is something we cannot deliver through our products." What did he mean by "delivering culture" as opposed to delivering high-performance technology and products which are also an outgrowth of Japanese culture? His remarks inspired me to examine my activities, and while serving as Envoy, I was responding to those remarks, thinking, "If I could serve as a catalyst for helping people all over the world understand the mind-set of Japanese people and of the country itself, and if my service somehow contributes to increasing commerce and other economic activities, then my role as a bearer of Japanese culture could make a significant difference. If I bear that in mind and keep pursuing cultural exchange in my own personal way, then it will make my life much richer."

The program I performed included "*Kaidan: Miminashi Hōichi*"; *warabe uta* (traditional children's songs), the lyrics of which reflect a time of poverty and which are sung with tunes very unique to Japan; and "*Heike Monogatari*." I wondered how my explanation of the opening passage of *Heike Monogatari*, called "*Gion Shōja*," which was accompanied by a biwa performance full of *wabi-sabi* (a sense of simplicity and quietude), would be accepted by local audiences, but I just had to play it and see what happened. I set the stage with items which would create a Japanese ambience, such as candles (battery-operated), a red rug, floor lamps, and a display of "*Hannya Shingyo*" (Heart of Great Perfect Wisdom sutra), written on *washi* (Japanese paper) in *bokuju* (ink made of vegetable-oil-derived soot or pine soot), and illuminated the stage with subdued blue lighting. I also explained to the audience about Japanese traditions, such as how *kimono* (Japanese traditional dress) and *obi* (the *kimono* belt) are made, that right and left *zōri* (sandals) are shaped identically, and other things which we today would perceive as eco-friendly.

ブラジルでは浴衣姿で『平家物語』をお届け
Performing "*Heike Monogatari*" (The Tale of the Heike [Taira Clan]), wearing a *yukata* (a summertime cotton *kimono*)

イタリア クレモナ・ストラディヴァリウスヴァイオリン養成所の学生と
Instructing a student at the Antonio Stradivari International School of Violin Making in Cremona, Italy

During my days as Envoy, I met many people who left a deep impression on me. In Brazil, a second-generation Japanese who grew up with parents who never returned to their home country because of the war and who experienced severe hardship told me, "We are Japanese, but we don't know Japan. By watching you sing and walk in *kimono*, we experienced 'Japan.' It's not easy to visit Japan for us, but we thank you for today's performance. It made us glad that we were born Japanese." At a party hosted by the Deputy Permanent Representative of Japan to the United Nations in New York, United States, people from 16 countries commented in one form or another, "We felt that your biwa performance was a message of peace. Please deliver this tune 'Repose of Souls' around the world," their comments stemming from thoughts of their homelands or of neighbors afflicted by wars. In Europe, one person said, "I assume your song was a sad story. I don't know why, but it made me cry." There is no more rewarding comment to receive as a musician than that an audience member was moved without knowing why.

For a live audience, unlike that of a performer on the internet or on a CD, my presence in front of them is a "miniature walking Japan," that to be like a fragrance of incense representing Japan. I am convinced that the audiences sensed this through my cultural envoy activities. This is just one grass-roots activity, but the whole experience deeply inspired me to keep on pushing this small activity forward by continuing to play biwa.

Allow me to take this opportunity to thank everyone.

山井 綱雄

金春流能楽師

活動期間　平成 27 年 2 月 1 日～ 3 月 15 日
活動国　フランス，アメリカ，カナダ

Tsunao YAMAI

Noh Actor in Komparu School

Period of the activities:　From February 1 to March 15, 2015
Countries visited:　France, the United States and Canada

寿福の祈りと，多様性の享受

2015 年の 2 月 1 日から 3 月 15 日までの 42 日間，文化交流使として，フランス（パリ），アメリカ（ニューヨーク・シラキュース・バーリントン・ポートランド・ロサンゼルス），カナダ（ヴィクトリア・バンクーバー）の 3 か国 8 都市を廻りました。

私は，西洋文化と日本を始めとした東洋文化との比較，それらを含む〈現代〉という時代の流れの中で，世界中の人々，特に西洋文化の方々に，能を通じて日本伝統文化の意義をどう伝えるかを考え，世界中の人々の心にダイレクトに訴える，生きるヒントや糧を与える「現代の活きた芸術」として見せるために，様々なことに工夫を凝らし，挑戦しました。

具体的には，一般の方向けや学校・大学において，能ワークショップ，共同制作，デモンストレーションを行いました。特に，カナダ・バンクーバーで行ったワークショップでは，現地の方 20 名に謡・仕舞の 5 日間連続稽古を実施し，最後は発表会を敢行。日本から応援に来た私の後援会社中 30 名も客演し，親善交流が実現しました。また，同じくバンクーバーでの現地作曲家による能『通小町』を基にした実験能オペラ『MOMOYA』の共同創作では，自ら主演を務め，

一般・学生向けに能の舞を実演
Performing Noh dance for the audience and students

アメリカ バーモント州ミドルベリー大学でのワークショップ
Workshop at Middlebury College in Vermont, the United States

好評を博しました。（現在，現地にて本格オペラとしての上演計画が進行中です。）

さらに，活動のメインとして据えた「温故知新」の特別デモンストレーション『繋ぐ～多次元を～』は，舞・謡・能楽囃子にピアノを入れて構成し，その結果，各地でオール・スタンディングオベーションを頂きました。

実演の後には必ず，敢えて「言葉」で，作品の意義をお話ししました。それは「多様性の享受」「共存共栄」。我が金春流は 1400 年に及ぶ永きの古から，能を通じて「皆が幸せであることを祈る」ことを続けてきました。金春流の初代は中国・韓国からの渡来人であり，大陸からの宗教や芸能と，日本古来の宗教・芸能が渾然一体となり熟成され，今日の能が成立したのですが，こうした「能のルーツ」をお話しする中で，日本人は〈異なる〉ことを認めて受け入れることを永年行ってきたことを強調しました。敢えて言葉にすることで，今世界が直面している様々な問題を意識し，そうした状況における能の深い存在意義を伝えたかったのです。その結果，各地で深い同意と拍手を得ることができ，能を通じて「日本のココロ」を伝えることができたと感じています。

A Prayer for Longevity and Happiness, and the Embracing of Diversity

学生による能面・装束の体験　視野の狭さに驚嘆した様子
Students tried wearing Noh masks and costumes. Putting on the masks, they seemed surprised at the narrow fields of vision

As a Japan Cultural Envoy, I performed Noh in eight cities in three different countries, in the 42-day period between February 1 and March 15, 2015. The cities I visited included Paris, France; New York City, Syracuse, Burlington, Portland, and Los Angeles in the United States; and Victoria and Vancouver in Canada.

What I have attempted to do through these performances, exercising much creativity, was to provide audiences around the globe a first-hand experience of Noh as a "contemporary living art" which offers inspiration for and enrichment of life. To that end, I devoted myself first to thinking about how Noh could serve as a medium for communicating the meaning of traditional Japanese culture, particularly to people of Western cultures, in the context of comparing Eastern cultures, including Japan, to those of the West, in the light of contemporary settings.

Specifically, I held Noh workshops and demonstrations, and co-produced Noh dramas at events for the general public, and at schools and universities. For a workshop in Vancouver, I held a five-day training session in *utai* (vocals) and *shimai* (performance without masks or costumes) for 20 locals, topped off with a Noh performance. Thirty members of my support group came from Japan to take part in the performance as guest actors and we had a great time of friendship exchange. Also in Vancouver, I co-produced and played the leading role in an experimental Noh opera, "*MOMOYA*" composed by a local musician based on the Noh play "*Kayoi Komachi*" (Courting Komachi), which was received very favorably by the audience. (Currently, a plan to produce "*MOMOYA*" as a full-scale opera in Vancouver is underway.)

『擦り足』の実演に見入る学生たち
Students watching the performance of *suriashi* (sliding feet)

Moreover, I conducted a series of special demonstration, the main theme of which was *Onko-chishin*, entitled "*Tsunagu—Tajigen Wo*" ("Be connected —on the diversity of dimensions"), which was composed of *mai* (dances), *utai*, and *nogaku-hayashi* (musical accompaniment for Noh) with piano. At many venues, we received standing ovations.

After each demonstration, I deliberately explained the meaning of the work in words, because the focus of the Komparu School for the past 1,400 years has been to pray for global happiness through Noh plays, based on the School's understanding of the embracing of diversity and co-existence/co-prosperity. The School was founded by an immigrant from China who came to Japan via Korea, and was developed through incorporating the art and religion of China into indigenous counterparts. In my explanation of the roots of Noh, I underscored the fact that Japanese people have always embraced differences and incorporated them into their own culture. I communicated this in words in hope that, given all the challenges faced by the world today, the audience would sense the significant role Noh can play in remedying these challenges. My words were received with deep empathy and applause at many venues, suggesting that I was able to convey the "heart of Japan" through Noh.

青木 涼子

能×現代音楽アーティスト

活動期間　平成 27 年 6 月 20 日～ 8 月 9 日，平成 27 年 9 月 17 日～ 11 月 1 日
活動国　アイルランド，フランス，ドイツ，デンマーク，イギリス，ハンガリー，イタリア

Ryoko AOKI

Noh Performer

Period of the activities:　From June 20 to August 9, 2015 and from September 17 to November 1, 2015
Countries visited:　Ireland, France, Germany, Denmark, the United Kingdom, Hungary and Italy

能と現代音楽　ヨーロッパで作曲家に会う

2015/7/3　パリ日本文化会館“Noh × Contemporary Music パスカル・デュサパン氏を迎えて”写真撮影：国際交流基金
On July 3, 2015, “Noh × Contemporary Music Inviting Mr. Pascal Dusapin” at the Japan Cultural Institute in Paris, France Photographed by Japan Foundation

私は東京藝術大学で能の観世流シテ方を学び，現在は「能×現代音楽アーティスト」として，能の「謡」を素材に用いた作品を，作曲家に委嘱し，ヨーロッパでの公演活動を多く行ってきた。今回の文化交流使の期間中は，能からインスパイアされた新しい音楽作品，舞台作品を今後生み出すために，欧州の作曲家，オペラ演出家との共同制作や情報交換を実施した。

まず，今回の活動の柱として「Meeting Composer」と題し，私が今後作品を書いてもらいたい作曲家に公開プレゼンをするという企画を実施した。内容としては，はじめに私が自分の活動についての口頭のプレゼンテーションを行い，その後，古典の能からの抜粋，そして地元の奏者を共演者に迎え，私のために書かれた現代曲を演奏。後半は，それを受けてゲストの作曲家と私が，能の新作の可能性について対談を行った。フランス，ハンガリー，ドイツの 3 か国で，パスカル・デュサパン，ペーテル・エトヴェシュ，細川俊夫という音楽の世界のトップレベルの作曲家をゲストに迎え，各都市で大きな反響を得ることができた。

作曲家だけではなく，オペラ演出家とのコラボレーションも実現した。来期，ミラノ・スカラ座でデビューする今注目のオペラ演出家である，フレデリック・ウェイク＝ウォーカーとのワークショップの成果発表とトークイベントを，ベルリンの在ドイツ日本国大使館で行った。また，アイルランドでは能に深い関心を持っていたことで知られる W.B. イェイツの生誕 150 周年であることにちなみ，各地でコンサートとレクチャーを実施した。このほか，デンマーク，イギリス，イタリアにも赴き，コンサートやレクチャーに加え音楽関係者との情報交換を行い，貴重な機会となった。

このような約 100 日間の文化交流使の活動を終え，帰国した。私が行っている能と現代音楽の活動は難解で，エッジがきいているものなので，一般の方に簡単に理解されるものではないということは理解している。しかし，今回文化交流使に指名いただいたお陰で，日本のメディアにも多く取り上げられた。来年はあいちトリエンナーレの参加アーティストにも選ばれたこともあり，ヨーロッパでの公演はもちろんのこと，日本での上演の機会も今後増えればと願っている。これをステップとして更なる飛躍を目指していきたいと思う。

終演後，パスカル・デュサパンとフルーティストのマリオ・カローリと共に
Together with Pascal Dusapin and Mario Caroli, Flutist, after Performance

2015/9/22　ハンガリーBudapest Music Center“Noh × Contemporary Music ペーテル・エトヴェシュ氏を迎えて”
On September 22, 2015, “Noh × Contemporary Music Inviting Mr. Peter Eötvös” at Budapest Music Center in Hungary

2015/10/21　ケルン日本文化会館“Noh × Contemporary Music 細川俊夫氏を迎えて”
写真撮影：国際交流基金
On October 21, 2015, “Noh × Contemporary Music Inviting Mr. Toshio Hosokawa” at the Japan Cultural Institute in Cologne (Köln), Germany Photographed by Japan Foundation

Noh and Contemporary Music: Meeting Composers in Europe

After learning the main roles (*Shite-kata*) of the Kanze school of Noh at Tokyo University of the Arts, I have placed emphasis on performance activities in Europe as a “Noh × contemporary music artist” using works created by composers based on Noh chants. Serving as a Japan Cultural Envoy this time, I have collaborated and exchanged information with composers and opera directors in Europe so as to create new musical works and stage productions inspired by Noh.

As a main activity of Cultural Envoy, I organized a project “Meeting the Composer” where I invited composers whom I would like to collaborate for creating new works and gave them public presentations. Each event consisted of two parts. For the first half, I gave a brief presentation about my activities, and then performed extract of classical Noh and a piece of contemporary music composed for me jointly with local musicians. For the last half, a guest composer and I discussed the potentials of new Noh works in response to the performance. During my stay in the three countries of France, Hungary and Germany, I invited leading composers of the world, Pascal Dusapin, Peter Eötvös and Toshio Hosokawa, to join this project and received great responses in every city I visited.

I also realized collaboration with opera directors. I presented the outcomes of the workshop conducted with Frederic Wake-Walker, a high-profile opera director making his debut at La Scala Theater in Milan in the next season, along with a talk event at the Japanese Embassy in Berlin, Germany. In Ireland, I gave lectures and concerts in many cities in commemoration of the 150th year since the birth of William Butler Yeats, who is well known for having had much interest in Noh. I also visited Denmark, Britain and Italy to exchange information with musical artists as well as to give lectures and concerts, which provided a valuable opportunity for me.

I came back to Japan after completing the activities as a Japan Cultural Envoy for about 100 days. I know that my cutting-edge activities combining Noh with contemporary music are difficult for the public to understand. However, my activities have been repeatedly introduced through the Japanese mass media due to my service as a Japan Cultural Envoy. I sincerely hope that my performance opportunities will increase further not only in Europe but also in Japan, such as Aichi Triennale where I will work as a nominated member artist this year. I would like to make the next leap forward, taking this experience as the first step.

2015/10/21　ケルン日本文化会館“Noh × Contemporary Music 細川俊夫氏を迎えて”
写真撮影：国際交流基金
On October 21, 2015, “Noh × Contemporary Music Inviting Mr. Toshio Hosokawa” at the Japan Cultural Institute in Cologne (Köln), Germany Photographed by Japan Foundation

柳原 尚之

近茶流嗣家（きんさりゅうしか），「柳原料理教室」副主宰

活動期間　平成 27 年 7 月 29 日～ 9 月 20 日，平成 27 年 9 月 28 日～ 11 月 8 日
活動国　ニュージーランド，ブラジル，カナダ，アメリカ

Naoyuki YANAGIHARA

The School of Kinsa, Yanagihara School of Traditional Japanese Cuisine

Period of the activities:　From July 29 to September 20, 2015 and from September 28 to November 8, 2015
Countries visited:　New Zealand, Brazil, Canada and the United States

Washoku for All －和食を世界に－

2013 年ユネスコ無形文化遺産に認められ，世界の有名料理人が食材，調理法などを，自国の料理に取り入れ始めたこともあり，和食は世界的に注目されています。一方，海外にある和食料理店では，他のアジア料理と合わせたフュージョン料理が出されることが多く，和食本来の姿を海外の方々が体験する機会は多くないのが現状です。

今回の文化交流使では，これから活躍する若い人たちに本当の和食に触れてもらいたいという思いから，各国の大学や，料理学校にて，料理を専攻する学生を対象とした活動を多く行いました。

講義では，座学，実演，実習の 3 つの柱をつくり，学校側の希望や講義の期間や人数に応じて，プログラムを立てました。座学では，和食の特徴である，季節感，豊富な食材，健康的な献立，年中行事との関わりの話から，歴史的，文化的背景などに至るまで，動画や画像を多く用いて説明しました。

実演では，日高や利尻など 4 種類の昆布や鰹節削り器の実物を見せながら，だしをひくところから始まり，お椀や煮物，寿司などをつくりました。

実習では，実演でみせた 3，4 品の料理を学生達に作ってもらいました。学生達が魚をおろす場合は，日本から持ち込んだ出刃包丁と柳刃包丁の和包丁 10 本を使えるようにしました。切れ味の良い和包丁は人気で，いつも順番待ちになりました。

3 か月の活動を通して，寿司や天ぷらだけではない，もっと深い和食の魅力を伝えることができたかと思います。和食の水や調味料に対する考え方やだしの話など具体的な講義ができて，これがきっかけとなり，もっと海外での和食文化が発展することを期待しています。一方，海外では日本食材の入手が難しい場合も多く，特に和食は水自体も味に影響するために，現地での適した水探し，そして代替えになる食材を探すなど，日本では感じえない海外での和食をつくる難しさも実感しました。学生達の和食への熱意を肌で感じ，多くの料理人や料理関係者との交流できたことは，私にとっても大きな収穫となりました。

最後に，プログラム作成段階から現地の記録撮影までサポートしてくれた，友人安藤卓氏には，深い感謝をしたいです。また，各活動先に食材の提供をしていただいたキッコーマン株式会社，株式会社マルハチ村松の両社には御礼を申し上げます。

ニュージーランド オークランド工科大学でのデモンストレーション風景　だしをひいているところ
Demonstration on how to make *dashi* soup at Auckland University of Technology in New Zealand

ブラジル クリチバ日系婦人会講習風景
Seminar for the Japanese Women's Association in Curitiba, Brazil

Washoku for All
-Japanese Cuisine to the World-

カナダ大使館公邸食事会での料理　サーモンとたい昆布締めの手鞠寿司
Menu of the dinner at the Japanese Ambassador's Residence: *temari-zushi* using salmon and sea bream sandwiched between sheets of *kombu* kelp

Recognized as an intangible cultural heritage by UNESCO in 2013, Washoku or Japanese cuisine, the ingredients and recipes of which have been gradually introduced into other national dishes by famous chefs overseas, now attracts attention globally. In most cases, however, it is rare for people overseas to taste authentic Japanese cuisine at Japanese restaurants there due to mixing it with other Asian cuisine.

During my service as a Japan Cultural Envoy, I have organized several activities for students specialized in cooking at universities and culinary schools overseas, hoping that promising young people would stimulate their interest and increase their expertise in traditional Japanese cuisine.

For the program composed of a lecture, demonstration and cooking practice, I formulated the coursework based on requests from the school, the seminar period, and the number of students. At the lecture, I explained the characteristics of Japanese cuisine including a sense of the season, abundant ingredients, healthy menus, and involvement with annual events, as well as its historical and cultural backdrops, by using many videos and images.

At the demonstration, I showed how to make basic soup called *dashi* while displaying an actual dried bonito shaver, as well as four different types of kelp called *kombu* such as Hidaka and Rishiri. Then, I made Japanese soup, a cooked dish, *sushi*, and others.

At the cooking practice, students actually made three or four dishes I had demonstrated. I prepared ten Japanese kitchen knives called *deba*, broad-bladed knives, and *yanagiba*, knives for *sashimi*, for students to cut fish. These sharp knives were popular among the students, who always made a long line.

Through the program activities over three months, I succeeded in telling them that Japanese cuisine is not just *sushi* and *tempura*, but has other diverse yet attractive features. I gave them detailed lectures on concepts of water and seasonings in Japanese cuisine, as well as basic soup, *dashi*. I hope that Washoku culture will develop further overseas from these activities. Unlike in Japan, I felt it difficult to cook authentic Japanese cuisine overseas, where it is often difficult to obtain the necessary ingredients. I had to find good-quality soft water, which directly affects the taste of Japanese food, as well as alternative ingredients. I also learned a lot from the enthusiasm shown by the students for Japanese cuisine, and by interacting with many chefs and persons involved.

Last but not least, I would like to express my sincere gratitude to a friend of mine, Mr. Taku Ando, who gave me support from preparation of the program to local recording and shooting. I greatly thank Kikkoman Corporation and Maruhachi Muramatsu, Inc. for their ingredients provided for every location.

カナダ ジョージブラウン大学にて和包丁を使って魚を捌く
Cutting fish with a Japanese knife at George Brown College in Canada

アメリカ カリナリー・インスティテュート・オブ・アメリカにて「なぜ日本は魚食文化が発展したか」についての説明中
Discussing why fish-eating culture was developed in Japan at The Culinary Institute of America, the United States

◎ 編集について
・文化交流使による活動報告は，筆者本人の表現を尊重しており，公文書上の表記方法等とは異なる場合があります。

◎ Note
- We respect the right of Japan Cultural Envoys to express themselves individually in presenting these activity reports, so please be aware that the terminology used may not necessarily follow official guidelines.

文化交流使一覧

文化庁文化交流使一覧 2016年3月現在

「文化交流使」には5つのカテゴリーがあります。

1. **長期派遣型**　日本在住の芸術家, 文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し, それぞれの専門分野で講演, 講習や実演, デモンストレーション等を行います。（平成27年度～）
2. **海外派遣型**　日本在住の芸術家, 文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し, それぞれの専門分野で講演, 講習や実演, デモンストレーション等を行いました。（平成15年度～平成26年度実施）
3. **短期指名型**　国際芸術交流支援事業により海外で公演等を行う芸術団体等が, 現地の学校等で実演会, 演奏会等を行い, 日本文化の普及活動を行いました。（平成20年度～平成25年度実施）
4. **現地滞在者型**　海外在住の芸術家, 文化人がその滞在国で, それぞれの専門分野で講演, 講習や実演デモンストレーション等を行いました。（平成15年度～平成21年度実施）
5. **来日芸術家型**　公演等で来日する諸外国の著名な芸術家, 文化人が, 日本滞在期間を利用して学校等を訪問し, 実演, 講演等を行いました。（平成15年度～平成19年度実施）

平成15年度（2003年）

○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 12名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
三浦 尚之（なおゆき）	音楽プロデューサー	アメリカ	平成15年7月20日～9月1日
渡辺 洋一	和太鼓奏者	アメリカ	平成15年8月15日～9月6日
田中 千世子	映画評論家	ヨルダン, スロバキア, アイスランド, ハンガリー	平成15年8月15日～12月9日
小山内（おさない） 美江子	脚本家	カンボジア	平成15年8月20日～9月24日
梅林 茂	作曲家	イタリア	平成15年8月27日～11月8日
国本 武春*	浪曲師	アメリカ	平成15年9月12日～平成16年8月10日
バロン吉元	漫画家	スウェーデン	平成15年9月22日～11月21日
三谷 温（おん）*	ピアニスト	クロアチア	平成15年9月27日～平成16年5月14日
笑福亭 鶴笑（かくしょう）*	落語家	タイ, イギリス	平成15年12月1日～平成16年1月15日, 平成16年3月30日～平成17年3月29日
小宮 孝泰*	俳優	イギリス	平成16年1月16日～5月11日
平野 啓一郎*	作家	フランス	平成16年2月28日～平成17年2月27日
四方田（よもた） 犬彦*	映画評論家	イスラエル, セルビアモンテネグロ	平成16年3月15日～12月20日

〈現地滞在者型 ── 4名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
高岡 美知子*	答礼人形研究家	アメリカ	平成16年3月1日～平成17年2月28日
松本 直（なお）み*	舞台照明研究家	フィリピン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ラーシュ・ヴァリエ*	詩人, スウェーデン議会国際課長	スウェーデン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ローチャン由理子*	画家	インド	平成16年3月1日～平成17年2月28日

〈来日芸術家型 ── 5組〉

氏　名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
ソレダット	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成15年10月15日	代々木高等学院
ケント・ナガノ	指揮者	アメリカ	平成15年10月30日	品川区立立会小学校
ルノー・カプソン	ヴァイオリニスト	フランス	平成16年1月7日	東村山老人ホーム
クリスティアン・アルミンク	新日本フィールハーモニー交響楽団音楽監督	オーストリア	平成16年1月14日	墨田区立両国中学校
ディビット・バイヤット	ホルン奏者	イギリス	平成16年3月15日	福岡市立舞鶴中学校

平成16年度（2004年）

○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 5名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
北村 昭斎（しょうさい）	重要無形文化財「螺鈿」(各個認定)保持者	ドイツ	平成16年6月2日～7月10日
杉本 洋（ひろし）	日本画家	カナダ	平成16年9月1日～11月30日
橋口 譲二*	写真家	ドイツ	平成16年12月13日～平成17年12月12日

井上 廣子(ひろこ)*	造形作家	オーストリア	平成17年1月10日～平成18年1月9日
宮田 まゆみ	笙演奏家	ギリシャ, イタリア, フランス, ドイツ, ルクセンブルク	平成17年2月1日～2月28日

〈来日芸術家型 ── 5組〉

氏　名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
イシュトヴァーン・コロッシュ	オルガニスト	ハンガリー	平成16年6月12日	桜美林大学
エムバイヤ・ブラス	金管五重奏	アメリカ	平成16年6月14日	神戸市立港島小学校
フランソワー・ルルー	オーボエ奏者	フランス	平成16年10月5日	長崎市立山里小学校
カール・ライスター	クラリネット奏者	ドイツ	平成16年10月19日	名古屋市立見付小学校
デニス・マトヴィエンコ	バレエダンサー	ウクライナ	平成17年3月3日	品川女子学院高等部

平成17年度（2005年）

○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 5名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
河村 晴久	能楽師	アメリカ	平成17年4月14日～5月25日
村井 健(けん)	演劇評論家	ロシア	平成17年5月3日～6月9日
神田 山陽(さんよう)*	講談師	イタリア	平成17年9月1日～平成18年8月31日
平田 オリザ	劇作家, 演出家	カナダ, アメリカ	平成18年1月3日～3月31日
Ikuo 三橋(みつはし)*	演出家	フランス, ベルギー, モロッコ, マダガスカル	平成18年1月15日～12月14日

〈現地滞在者型 ── 2名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
杉 葉子	女優	アメリカ	平成17年5月2日～10月31日
本名(ほんな) 徹次*	指揮者	ベトナム	平成17年11月17日～平成18年11月16日

〈来日芸術家型 ── 6組〉

氏　名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成17年6月15日	東京国際学園高等部
アンヘル・コレーラ	バレエダンサー	スペイン	平成17年7月24日	六本木ヒルズ
ソレダッド	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成17年7月25日	愛知県立明和高等学校
10人のミラクル・トランペッター TEN OF THE BEST	トランペット・アンサンブル	ドイツ	平成17年12月11日	秋田県立勝平養護学校
ラルス・フォークト	ピアニスト	ドイツ	平成18年2月6日	東京都立芝商業高等学校
日豪ジャズオーケストラ参加 オーストラリア・ミュージシャン	ジャズオーケストラ	オーストラリア	平成18年3月20日	広島県立尾道北高等学校

平成18年度（2006年）

○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 9名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
寺内 直子	神戸大学教授 日本の宮廷音楽・雅楽の研究及び演奏	アメリカ	平成18年8月28日～平成19年3月30日
源田 悦夫	九州大学教授メディア芸術・情報デザイン	中国, 韓国	平成18年8月31日～10月25日
川井 春香(しゅんこう)	華道家	スウェーデン, スペイン, イタリア, フランス	平成18年9月12日～12月15日
勝美 巴湖(ともこ)*	日本舞踊家	イギリス	平成18年12月26日～平成19年7月15日

坂手 洋二*	劇作家, 演出家	アメリカ, フランス, ドイツ	平成19年2月5日～4月13日
桂 小春團治	落語家	アメリカ	平成19年2月6日～3月10日
豊澤 富助	人形浄瑠璃文楽	イギリス, ドイツ, スイス, イタリア	平成19年2月26日～3月28日
寺井 栄*	能楽師（能楽観世流シテ方）	オーストラリア	平成19年3月5日～5月30日
小林 千寿*	囲碁棋士	オーストリア, スイス, ドイツ, フランス	平成19年3月14日～平成20年3月13日

〈現地滞在者型 ── 1名〉

氏　名／団体名	プロフィール	活動国	活動期間
大坪 光泉*	華道家	中国	平成18年9月15日～平成19年9月14日

〈来日芸術家型 ── 9組〉

氏　名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
アドリエル・ゴメス・マンスール	ピアニスト	アルゼンチン	平成18年4月24日	大分県日出町立日出小学校
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成18年6月20日	NPO楠の木学園（横浜）
ジョン・ナカマツ	ピアニスト	アメリカ	平成18年7月10日, 11日	新潟県立新潟盲学校, 新潟県立上越養護学校
ペーター・シュミードル	クラリネット奏者	オーストリア	平成18年7月14日	北海道立真駒内養護学校
エミリー・バイノン	フルート奏者	オランダ	平成18年7月22日	上甑老人福祉センター
ヴォルフガング・シュルツ	フルート奏者	オーストリア	平成18年8月26日	草津町立草津中学校
オーブリー・メロー	舞台演出家, オーストラリア国立演劇学校校長	オーストラリア	平成18年9月28日	東京都立富士高等学校
ツェンド・バットチョローン	モンゴル国立馬頭琴交響楽団芸術監督・指揮者	モンゴル	平成18年10月13日, 20日	相模原市立若松小学校, 板橋区立志村第四小学校
フランツ・リスト室内管弦楽団	管弦楽団	ハンガリー	平成19年1月18日	北海道帯広養護学校

平成19年度（2007年）

○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 9名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
立松 和平	作家	中国	平成19年4月27日～5月26日
三浦 友馨	華道家	中国	平成19年8月1日～9月28日
名嘉 睦稔	画家	韓国, フランス, スペイン	平成19年8月30日～11月13日
本間 博*	将棋棋士	フランス, イギリス, ドイツ, スペイン, モナコ	平成19年8月30日～平成20年5月29日
中村 享	盆栽作家	カナダ	平成19年9月5日～10月6日
円田 秀樹*	囲碁棋士	ブラジル, 中南米諸国, アフリカ	平成19年10月2日～平成20年7月1日
湯山 東	画家	フランス, チェコ, ドイツ	平成19年11月2日～12月19日
桂 かい枝*	落語家	アメリカ	平成20年3月31日～10月1日
橘 右門*	寄席文字書家	イギリス, ドイツ, ハンガリー	平成20年3月31日～平成21年2月16日

〈来日芸術家型 ── 7組〉

氏名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
セルゲイ・ナカリャコフ	トランペット奏者	フランス	平成19年4月17日	大分県日田市立桂林小学校
ファジル・サイ	ピアニスト	トルコ	平成19年7月11日	渋谷区立小学校
イアン・バウスフィールド	トロンボーン奏者	イギリス	平成19年7月14日	札幌市立札幌小学校
チェコ少年少女合唱団	合唱団	チェコ	平成19年7月30日	北九州市立穴生中学校
アントニー・シピリ	ピアニスト	アメリカ	平成19年8月23日	群馬県立西邑楽高等学校
イングリット・フリッター	ピアニスト	イタリア	平成19年9月29日	滝乃川学園一橋大学
ニコラ・ルーツェヴィチ	チェロ奏者	クロアチア	平成20年3月18日, 19日	北海道音更高校中札内文化創造センター

平成20年度（2008年） ○派遣順　*印は，次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 8名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
島田 雅彦	作家	アメリカ，韓国	平成20年7月1日～平成21年3月31日
千宗屋*	茶道家	アメリカ，フランス，イタリア，イギリス，ドイツ，モナコ，メキシコ，ベルギー	平成20年7月31日～平成21年6月30日
梅若猶彦	能楽師（シテ方），静岡文化芸術大学教授	フィリピン	平成20年8月2日～9月8日
小林 千寿	囲碁棋士	フランス，オーストリア，ドイツ，スイス，イギリス	平成20年8月27日～平成21年3月26日
中川 衛	重要無形文化財「彫金」（各個認定）保持者	アメリカ	平成20年9月8日～10月20日
常磐津文字兵衛	常磐津三味線奏者，作曲家	韓国	平成20年9月27日～10月27日
福田栄香（千栄子改め）	地歌箏曲演奏家	フィリピン，インドネシア，マレーシア	平成21年2月17日～3月16日
須田 賢司*	木工芸作家	ニュージーランド	平成21年3月22日～5月4日

〈現地滞在者型 ── 2名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
上野宏秀山*	尺八奏者	シンガポール	平成21年2月1日～4月30日
ブーイ 文子*	茶道家	タイ，インド	平成21年2月1日～4月30日

〈短期指名型 ── 5組〉

団体名	分野	在住国	活動期間	備考
財団法人日本伝統文化振興財団	狂言	インドネシア	平成20年9月3日，5日	山本東次郎家，狂言公演
舞踊集団菊の会	舞踊（邦舞）	ブラジル	平成20年9月16日，25日	
太神楽曲芸協会	太神楽曲芸	カンボジア	平成20年12月3日	
鬼太鼓座	和太鼓	ブラジル	平成20年12月16日	
大歌舞伎「NINAGAWA十二夜」ロンドン公演実行委員会	歌舞伎	イギリス	平成21年3月26日	

平成21年度（2009年） ○派遣順

〈海外派遣型 ── 10名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
有野芳人	将棋棋士	中国	平成21年5月27日～8月9日
青木 紳一	囲碁棋士	オランダ，オーストリア，ドイツ，スロバキア	平成21年7月24日～12月27日
喜瀬慎仁	三線奏者	フィリピン，中国，フランス，ドイツ，イギリス	平成21年8月1日～平成22年1月31日
鶴賀若狭掾	重要無形文化財「新内節浄瑠璃」（各個認定）保持者	イギリス，アイルランド，オランダ，ベルギー	平成21年9月14日～10月29日
竹本千歳大夫	人形浄瑠璃文楽	チェコ，ドイツ，オーストリア	平成21年9月24日～10月24日
蜂谷宗苾	香道家元後継者	フランス，中国，モナコ，イタリア，ドイツ，バーレーン，アメリカ，シンガポール，フィンランド	平成21年9月30日～平成22年3月24日
武関翠篁	竹工芸家	ドイツ	平成21年10月11日～11月17日
伊部 京子	和紙造形家	アメリカ，エジプト	平成21年11月3日～平成22年3月3日
久保修	切り絵画家	アメリカ	平成21年12月30日～平成22年3月26日
三橋貴風	尺八演奏家	韓国，ブラジル	平成22年2月5日～3月23日

〈現地滞在者型 ── 1名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
澤崎琢磨	和太鼓奏者	パラグアイ，ブラジル	平成21年8月1日～10月31日

〈短期指名型 ── 5組〉

団体名	分野	活動国	活動期間	備考
NPO法人和文化交流普及協会	伝統芸能（獅子舞, 津軽三味線, 和太鼓等）	ウルグアイ	平成21年9月7日, 8日	
猿楽會（さるがくかい）	狂言	オーストリア	平成21年10月13日	
社団法人落語芸術協会	落語	カンボジア	平成21年11月25日	
株式会社オフィスK2	和太鼓	ウズベキスタン	平成22年1月23日, 24日, 26日	和太鼓「婢弥鼓」
ミュージック・フロム・ジャパン推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成22年2月22日	

平成22年度（2010年） ○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 12名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
黛（まゆずみ） まどか	俳人	フランス, イギリス, ルーマニア, ベルギー	平成22年4月24日～平成23年3月25日
いわみ せいじ*	漫画家	シンガポール, マレーシア, 韓国, イギリス	平成22年8月4日～平成23年7月31日
藤間 万恵（まえ）*	日本舞踊家	中国	平成22年9月4日～平成23年7月16日
佐々木 康人（やすひと）	華道家	ベトナム, シンガポール, タイ, マレーシア	平成22年9月9日～11月14日
蓑輪（みのわ） 敏泰（としやす）	和太鼓奏者	メキシコ	平成22年9月20日～10月26日
笑福亭 銀瓶（ぎんべい）	落語家	韓国	平成22年9月30日～10月31日
山村 浩二	アニメーション作家	カナダ	平成22年11月12日～12月19日
安田 泰敏（やすとし）	囲碁棋士	オーストリア, スイス, フランス, ロシア, ヨルダン, イスラエル, モロッコ	平成22年11月15日～平成23年2月28日
野田 哲也	版画家	イスラエル, イギリス	平成22年12月3日～平成23年1月17日
山内 健司（けんじ）	俳優	フランス, スイス, ベルギー	平成23年1月7日～3月31日
澤田 勝成（かつなり）	津軽三味線奏者	中国	平成23年2月20日～3月20日
津村 禮次郎（れいじろう）*	能楽師	ロシア, ハンガリー	平成23年2月24日～4月9日

〈短期指名型 ── 4組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
一般社団法人日本伝統芸術国際交流協会	沖縄舞踊	メキシコ	平成22年10月19日
財団法人日本余暇文化振興会	津軽三味線	メキシコ	平成22年10月23日
有限会社アトリエ・アサクラ	日本舞踊	韓国	平成22年10月28日, 29日, 11月1日, 2日
金春流能（こんぱるりゅう）ドイツ巡回公演実行委員会	能	ドイツ	平成23年1月20日, 28日

平成23年度（2011年） ○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 6名・1グループ〉

氏　名／グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
真鍋 尚之（なおゆき）*	雅楽演奏家, 作曲家	ドイツ, フランス, オーストリア, スウェーデン, ロシア, ベルギー, オランダ, イタリア, スイス, ベラルーシ, チェコ, セルビア	平成23年5月14日～平成24年5月13日
時友（ときとも） 尚子（ひさこ）	染色家	エストニア, ラトビア, リトアニア, フィンランド	平成23年10月26日～11月25日
薄田 東仙（とうせん）	書道家, 刻字家	イスラエル	平成23年10月27日～12月4日
辰巳 満次郎*	能楽師	韓国	平成24年1月9日～4月19日
AUN（井上良平, 井上公平, 齋藤秀之）	和楽器奏者	タイ, ラオス, ベトナム, カンボジア	平成24年1月21日～2月25日
塩田 千春	現代美術家	オーストラリア	平成24年2月7日～3月7日
佐佐木（ささき） 幸綱（ゆきつな）*	歌人	ドイツ, ポーランド, スイス, フランス, オランダ	平成24年3月8日～6月4日

〈短期指名型 ── 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
詁傳(こでん)の会	人形浄瑠璃文楽（素浄瑠璃）	ドイツ	平成23年9月26日
ミュージック・フロム・ジャパン推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成24年2月21日
特定非営利活動法人ACT.JT	伝統芸能, 大衆芸能	アメリカ	平成24年3月26日～28日

平成24年度（2012年） ○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 8名・1グループ〉

氏　名／グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
榎戸(えのきど) 二幸(ふゆき)	生田流箏曲	ドイツ, オーストリア, イギリス	平成24年5月28日～8月31日
うるまでるび（うるま, でるび）*	アニメーション・アーティスト	アメリカ	平成24年9月2日～平成25年8月31日
茂山(もとひこ) 宗彦*	大蔵流狂言師	チェコ, オーストリア, ルーマニア, リトアニア, ポーランド	平成24年10月3日～平成25年7月3日
矢崎 彦太郎	指揮者	アルジェリア	平成24年12月6日～平成25年3月16日
海老原(えびはら) 露巌(ろげん)	墨アーティスト, 書道家	イタリア	平成25年1月20日～2月23日
藤本 吉利(よしかず)	和太鼓奏者	中国	平成25年1月21日～2月21日
小島 千絵子	民俗舞踊家	スペイン, ポルトガル, ベルギー, イギリス	平成25年1月21日～3月11日
山路(やまじ) みほ*	箏曲演奏家	ロシア, ドイツ, イタリア, スイス, スロベニア, オーストリア, スロバキア, フィンランド, ラトビア, ハンガリー	平成25年1月27日～6月30日
大澤 奈留美*	囲碁棋士	アメリカ, ブラジル	平成25年3月14日～5月13日

〈短期指名型 ── 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
黒森神楽(くろもりかぐら)アメリカ公演実行委員会	伝統芸能, 大衆芸能	アメリカ	平成24年10月31日
コンドルズ	舞踊	タイ	平成25年3月1日
公益財団法人せたがや文化財団	演劇	アメリカ	平成25年3月25日

平成25年度（2013年） ○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ── 8名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
土佐 信道	明和電機社長, アーティスト	フランス	平成25年6月3日～7月11日
平尾 成志(まさし)	盆栽師	リトアニア, イタリア, フランス, オランダ, アメリカ, メキシコ, オーストラリア, ドイツ, トルコ	平成25年6月11日～10月24日
武田 双雲(そううん)	書道家	ベトナム, インドネシア	平成25年7月31日～8月31日
レナード 衛藤(えとう)*	和太鼓奏者	スイス, フランス, イタリア, チュニジア, ポルトガル, インド, オランダ, ドイツ, ハンガリー	平成25年8月8日～平成26年7月23日
森山 開次	ダンサー, 振付家	インドネシア, ベトナム, シンガポール	平成25年10月18日～12月3日, 平成26年1月4日～19日
挾土(はさど) 秀平	左官技能士	アメリカ	平成25年10月19日～11月30日
森山 未來(みらい)*	俳優, ダンサー	イスラエル, ベルギー, イギリス, スウェーデン, ドイツ, ロシア	平成25年10月21日～平成26年10月20日
長谷川 祐子*	キュレーター（学芸員）, 大学教授	アラブ首長国連邦, ドイツ, モロッコ, フランス, アメリカ, モナコ, アルメニア, グルジア, スウェーデン, ベルギー, イギリス, イタリア, 中国, チェコ, ハンガリー, スイス, ロシア, ポルトガル	平成26年3月12日～7月14日

〈短期指名型 ── 6組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
藝(げいまるざ)〇座	伝統芸能（日本舞踊）	スペイン	平成25年9月19日, 28日
チェルフィッチュ	演劇（現代演劇）	ギリシア	平成25年10月31日, 11月2日
小野雅楽会	伝統芸能（雅楽）	ロシア, ドイツ	平成25年11年12日, 14日, 18日
株式会社わらび座	舞踏（民族舞踊）	ベトナム	平成25年12月19日, 26日
山海塾	舞踊（舞踏）	インド	平成26年1月15日, 16日
声明の会・千年の聲	伝統芸能（宗教音楽）	アメリカ	平成26年3月7日

平成26年度（2014年） ○派遣順

〈海外派遣型 ── 8名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
中澤 弥子(ひろこ)	食文化研究者, 長野県短期大学教授	フランス, ドイツ, ポーランド, ハンガリー, イタリア, スロバキア, イギリス	平成26年8月10日～10月13日
林 英哲	太鼓奏者	アメリカ, トリニダード・トバゴ, キューバ	平成26年9月25日～11月4日
林田 宏之	CGアーティスト	クウェート, ヨルダン, レバノン, サウジアラビア, バーレーン, ベトナム, タイ	平成26年11月1日～12月14日
若宮 隆志	「彦十蒔絵」代表	イギリス, フランス, 中国	平成26年11月2日～12月3日
平野 啓子	語り部, かたりすと	ドイツ, トルコ	平成26年11月14日～12月15日
櫻井 亜木子	琵琶演奏家	エルサルバドル, ブラジル, アメリカ, イギリス, イタリア, スイス, アルバニア	平成27年1月7日～3月21日
岡田 利規	演劇作家, 小説家	中国, 韓国, タイ	平成27年1月12日～3月2日
山井 綱雄	金春流(こんぱる)能楽師	フランス, アメリカ, カナダ	平成27年2月1日～3月15日

平成27年度（2015年） ○派遣順　*印は, 次年度も引き続き活動

〈長期派遣型 ── 7名〉

氏　名	プロフィール	活動国	活動期間
青木 涼子	能×現代音楽アーティスト	アイルランド, フランス, ドイツ, デンマーク, イギリス, ハンガリー, イタリア	平成27年6月20日～8月9日, 9月17日～11月1日
柳原 尚之	近茶流(きんさりゅうし)家(か), 「柳原料理教室」副主宰	ニュージーランド, ブラジル, カナダ, アメリカ	平成27年7月29日～9月20日, 9月28日～11月8日
矢内原 美邦	振付家, 劇作家, 近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授	シンガポール, マレーシア, タイ, ミャンマー, ベトナム, アメリカ, インドネシア, フィリピン	平成27年8月22日～平成28年1月31日
畠山 直哉	写真家	メキシコ, インド, フランス	平成27年9月2日～平成28年2月10日
小野寺 修二	コンテンポラリーダンス, マイム, 「カンパニーデラシネラ」主宰	ベトナム, タイ	平成27年12月15日～平成28年1月27日
藤田 六郎兵衛	能楽笛方 藤田流十一世宗家	イギリス, フランス, 韓国	平成28年2月23日～3月30日
吉田 健一*	「吉田兄弟」, 津軽三味線奏者	オランダ, スペイン, イタリア等	平成28年3月27日～5月25日（予定含む）

文化庁文化交流使フォーラム 2016 －第 13 回文化庁文化交流使活動報告会－
主催：文化庁

Japan Cultural Envoy Forum 2016
Host: Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan